



Contents

- フェリス女学院大学 チャペル
 スタンドグラス《祈りの道》
- 2025年度チャペルサービス
 学生による奨励
- 山手木曜礼拝
 ～音楽そのものの演奏によって賛美と祈りをささげる～
- キリスト教講演会（後期）
 「戦後80年 平和について考える」

『待望』 第百号発行の意味

相澤 一（宗教主事）

本号で、『待望』は第百号を迎えます。記念すべき第一号が発行されたのは1976（昭和51）年12月で、それ以来、およそ年二回の発行ペースで、50年後の今年（2026年）、第百号が無事発行されました。この記事執筆にあたり、キリスト教センターで第一号を閲覧しましたが、当時の発行元は「大学宗教部」となっており、執筆者も知らない方ばかりで、50年という年月の長さを感じました。

九月第三月曜日は「敬老の日」と定められています。しかし、現実には、敬老とはほど遠い「老害」という言葉が、特に若い世代の間に広がっています。その根本には、現代日本社会には老人の位置がないということがあるでしょう。AIが日進月歩いや秒進分歩で、先月の知識すら役に立たない今日、老人が生きてきた「歴史」やそれを通して得た「経験」は意味を持ちません。そして「歴史」や「経験」の意味が失われたことは、「長さ」や「つながり」の意味が失われていることを意味します。「時短」「タイパ」がもてはやされていることは、その表れでしょう。

しかし聖書は、イエス・キリストもパウロも、ユダヤ教や律法の「歴史」や、それらとの「つながり」を否定するような立場はとっていません。教会も「よく指導している長老たち、特に御言葉と教えのために労苦している長老たち（教会で長年にわたりクリスチャンとしての経験と知識を積み、教会の運営に携わる人たちは二倍の尊敬に値すると心得なさい）（1テモテ5:17）と勧告されています。その理由は、キリスト教は、絶えず上からの力によって新しくされつつ、生命的な連続をもって二千年の歴史を貫いて

きた、生きた伝統だからです。

クルマンという新約聖書学者によると、聖書における神の「永遠」とは、もともとは「長い時間」を意味するそうです。ですから、永遠なる神を経験し、神を知るためには、人間もまた「長い時間」を必要とします。人間の歴史も、世界の歴史も、よい時もあれば悪い時もあります。「神様ありがとうございます」と思わず声に出してしまう時もあるし、「神も仏もない」と暗然とする時もあります。それらの経験を通して、私たちは長く神との交わりを持つのであり、その神を経験する長さの中に、「時短」や「タイパ」の中には決してない、「神的なもの」があるのです。もちろんその「長さ」は、決して単なる時間の長さではありませんし、単に年を経ることでもありません。しかし神経験の長さは、現実的な人生の積み重ねと時間の経過なしには持つことができないのです。そして、キリスト教が「歴史」や「経験」を重んじる根拠は、この神経験が持つ意味なのです。

長年日本で奉仕された老宣教師が、引退して帰国する際にこうおっしゃいました、「長生きすることはすばらしいことです。神様の恵みを長く経験できるからです。』『待望』創刊から50年間の歴史は、その間執筆や編集発行に携わってきた方々、そして読者の方々が神を経験してきた歴史でもあります。この神経験が、フェリスのよき伝統として、二百号、三百号……千号と続いていき、神の恵みを喜び讃美する歴史として、世の終わりまで続いていくことを、神様にお祈りします。



フェリス女学院大学 チャペル

スタンドグラス《祈りの道》

フェリス女学院大学(緑園キャンパス)のチャペルに、静謐な光をたたえるスタンドグラス《祈りの道》が設置されたのは2003年2月のことです。詩人・八木重吉の詩「祈り」から着想を得て、光そのものをデザインする新しいスタンドグラスとして誕生しました。制作を手がけたのは、本学卒業生で、横浜スタンドグラス工房の大村典子氏。チャペルの空間と光を新しいかたちで生かす試みでした。

制作に込められた三つのテーマ

このプロジェクトには、当時学長だった佐竹明先生から、次の三つの要望がありました。

1. これまでにない、これからのスタンドグラスを。
2. 説教者がシルエットにならないよう、光をコントロールする。
3. アート的なスタンドグラス。

当時、祭壇奥の窓には白いガラスがはめ込まれており、強い光が差し込みすぎて説教者が影になってしまうという課題がありました。この問題を解決しつつ、空間全体を美しく包み込む光をつくり出すことが求められました。

光をつくるための制作技法

大村氏は長い試行錯誤の末、フェージングで制作したガラス板を鉛線で組み立てる技法にたどり着きました。ガラスパウダーやフリットを重ねたガラスに加え、高温で溶着することで、複雑で深みのある光と質感が生まれました。その結果、説教者が影にならないよう配慮しながら、柔らかな光が礼拝堂全体に広がるよう設計されています。

- スタンドグラス全体のサイズ：H7206 × W1534mm
- 制作年月日：2002年～2003年 完成は2003年2月6日。
- 施工会社：横浜バンダイ株式会社

奉獻の礼拝

2003年6月10日(火)、スタンドグラスを捧げるチャペル・サービスが行われ、祈りと賛美のうちに《祈りの道》は奉獻されました。この日、チャペルは新しい光に包まれ、学生・教職員・関係者がその完成をともに感謝しました。

世界に認められた“これからのスタンドグラス”

完成後、この作品は米国コーニング美術館主催の「New Glass Review 25」(2004年)に出品され、44か国2,527点の応募の中から100点が選ばれ入選を果たしました。フェリス女学院大学チャペルのスタンドグラス(スライド)は、コーニング美術館が永久収蔵しています。

【制作者】 大村典子氏に よるコメント

タイトル：「祈りの道」— 八木重吉の詩「祈り」より

ゆきなれた路の なつかしくて耐えられぬように わたしの祈りのみちをつくりたい

学生時代、そこでの歩みを想像して細長いチャペルの窓を見ていると八木重吉の詩、「祈り」が頭に浮かびました。スタンドグラスのデザイン画の中に学生時代に学んだ聖書の部分を所どころに表現しました。形では表現していませんので、ご覧いただいた時々の気持ちでイメージしていただけたらと思います。出エジプト記、キリストの変容、聖霊降臨、シンボルとしての魚、円等をイメージしながらデザイン画を作らせていただきました。— 大村典子

横浜スタンドグラス工房 代表：大村典子 1998年の横浜雙葉小学校(神奈川)をはじめ、全国の教会・学校・福祉施設などに多数のスタンドグラスを制作。フェリス女学院大学緑園チャペル《祈りの道》(2002年制作)は、同工房の代表作のひとつです。繊細な光の設計と、祈りに寄り添うデザインで知られ、制作から修復まで幅広く手がけています。

大村典子氏 受賞歴 1987年：第1回国際スタンドグラス展(米国コーニング美術館)入選 1994年：第7回公募スタンドグラス展(名古屋)入選 1994年：横浜市デザイン助成授与(「フェージングガラスの研究」) 1995年：横浜市主催 第1回「Designをデザインして展」グランプリ受賞(受賞作品：香水瓶「レガール」を商品化) 2000年：シチズン時計(リズム時計工業株式会社)「レガール」のデザインを商品化 2003年：New Glass Review 25(米国コーニング美術館)入選

《祈りの道》は、光と祈り、そして学びをつなぐ窓です。チャペルを訪れた際には、やわらかな光の中で、それぞれの“祈りの道”に、そっと思いを重ねていただければと思います。(M・H)

イルミネーション点灯式

12月1日(月)18:10より、イルミネーション点灯式を執り行いました。学生や教職員、近隣の方々など約200名が参列しました。聖書朗読とクリスマスのメッセージに続き、新しくなったイルミネーションを点灯しました。点灯の瞬間、聖歌隊 musica sacra が『もろびとこぞりて』を歌いました。聖歌隊には、学生だけでなく多くの教職員がワンステージメンバーとして加わりました。

最後に会衆賛美のひとつをもち、終了後はチャペルにて聖歌隊によるクリスマスコンサートを行いました。



2025年度チャペルサービス報告

緑園キャンパスでは、月曜日から金曜日までチャペルサービスを行いました。山手キャンパスでは、前期は毎週、後期は原則として隔週で山手木曜礼拝を行いました。メッセージ、司会、奏楽などでご奉仕くださった皆さまに、心より感謝申し上げます。学生による奨励をご紹介します。



「知りに行く」 6月18日 アンネのバラ記念礼拝：チャペルサービス T・M（音楽学部音楽芸術学科3年）

皆さんはキリバスという南半球の国を知っていますか。「環礁」という珊瑚礁が環状に成長した地形をしており、ギルバート諸島などの3つの諸島群からなる国です。ラグーンと呼ばれる内海とオーシャンと呼ばれる外海の2種類の海を持っており、非常に豊かな自然で溢れている国です。

私は今年3月に、学校の海外環境フィールド実習を通してこの国を訪れました。環礁国はもちろん、南半球に行くことさえ初めてであり、自然のパワーと美しさに圧倒されました。例えば、キリバスは2種類の海があるのと共に、最高到達地点でも海拔3mほどしかないため、まるで太平洋の真ん中にあるのではないかと思うほど、海に近い国です。外海は波が荒々しく、果てしない太平洋が広がっているのに対し、内海は穏やかでエメラルドグリーンの海が輝いており、全く表情が異なるのです。また、素晴らしい満天の星空が夜を彩り、日本からは見ることができない南十字星も観測することができます。まさに先ほど読んでいただいた詩篇8編34章にもあるように、神の偉大さやその力がその雄大な自然に現れていました。

しかし、そんな美しさの裏には多くの課題がありました。キリバスは経済規模が非常に小さく、オセアニアで最も貧しい国の一つともされています。それに伴い、安い輸入商品が中心になってしまっている食生活や、トイレの不足といった衛生環境に課題が生じています。また、制度が十分でない・国民の衛生観念が育まれていないことを原因に、車の路上投棄などの廃棄物処理も問題になっています。

私は今回の実習に参加する前、「キリバスの自然の豊かさを見て、それを守るためには何ができるか学ぼう」と考えていました。しかし実習を通して、「日本の環境がどれだけ整っているのか」という驚きと実感を得ました。水や電気が不自由なく使えること、道や公衆施設が清潔なこと、食べ物の衛生管理が徹底されていること。それらを楽しんでいる恩恵や、私たちが持つことができている高い衛生観念を当たり前と思わないようにしたいと強く思いました。

またそのようなことは実際に違いを肌で感じない理解することはできないことも、大きな気づきでした。環境保全のためのアクションはたくさんありますが、最初の一步は「知りに行く」ことだとも言えます。自国でできることが当たり前じゃないことを体験することで、日常生活の様々なシーンで環境への恩恵を感じ、行動し続けられるのではないかと考えます。

豊かな暮らしを支えてくれる方々や制度がある日本。温かい住民の方々も豊かな自然で溢れているキリバス。そして世界中の人々を、賛美歌第2篇144番にあるように、神はひとりずつ目をとめられ守られています。そのことへの感謝を忘れないようにしたいと感じています。そのために、自分の幸せは誰に支えられているのか、他人の幸せはどのようなものか、それを守るために私にもできることは何か、あらゆるものを「知りに行きたい」です。

「あたらしい世界へ」 8月23日 オープンキャンパス：チャペルサービス U・S（音楽学部音楽芸術学科4年）

私はこの大学に入学して初めて、キリスト教に本格的に触れるようになりました。高校時代までは、キリスト教とはほとんど縁がなく、教会や礼拝も、自分とは無関係の世界のこのように思っていました。ですから、入学してすぐに授業で「聖書」を開いたときは正直、「キリスト教の勉強っていったい何をやるのだろう?」と戸惑いました。

ところが実際に学び始めてみると、思いがけない発見がありました。聖書の物語は、歴史の本のようであり、小説のようでもあり、とても興味深く読めたのです。そして、そこに込められている教訓は、一つひとつがとても人間的で、普段の生活や人との関わり方に深くつながっていました。単なる宗教的な教訓ではなく、むしろ人が生きていくうえでのヒントのように感じました。初めて触れる私にとっても、自然に受け入れられる学びだったのです。

また、大学生活の中で特に大切な時間となったのが、毎週のチャペル礼拝でした。お昼の時間に礼拝があるので、午前中の授業や用事で慌ただしくなった気持ちをいったんリセットして、午後に向けて気持ちを整えることができます。静かなチャペルに座って、音楽を聴いたり、祈りに耳を傾けたりしていると、不思議と心が落ち着いてきます。

私にとって礼拝は、「立ち止まる時間」でした。普段の生活では、どうしても先の予定ややらなければならないことに追われてしまいがちです。でも、礼拝に参加することで、今ここにあることに感謝しよう、与えられている日常を大事にしよう、という気持ちを取り戻すことができました。

私の大学での4年間を振り返ると、「新しい世界に触れること」の大切さを実感します。最初は不安だったキリスト教の学びも、実際に経験してみると面白く、心を豊かにしてくれるものでした。友人や先生との出会いも含め、大学生活は私にとってまさに「新しい世界への扉」だったと感じます。

今日、この場にきている高校生の皆さんも、これから大学という新しい世界へと進もうとしています。きっと楽しみな気持ちと同時に、不安な気持ちもあるのではないのでしょうか。知らない場所に飛び込むことは、勇気がいることです。私自身も大学に入った当初、「自分にできるだろうか」「ここに居場所があるだろうか」と心配していました。けれども実際に歩みを進めてみると、その中でたくさんの新しい出会いがあり、自分を励まし、成長させてくれる経験がありました。だからこそ皆さんにも、新しい世界に一步踏み出すことを恐れないでほしいと伝えたいです。

最後に、本日の聖書箇所からひとつの言葉を紹介して、結びたいと思います。

イエスさまはこう語られました。「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」(ヨハネによる福音書15章5節)

この言葉は、私に「つながり」の大切さを改めて教えてくれるものでした。木から枝が離れてしまえば実を結べないように、私たちもつながりを大切にこそ、心に豊かな実を結ぶことができます。

どうか皆さんも、これから出会う新しい世界で、人とのつながりを大切に、自分自身の実りを育てていってください。大学での学びや経験が、皆さんにとってかけがえのない宝物になりますように。

ご清聴ありがとうございました。

「大学生活を振り返って」 1月7日 チャペルサービス

K・N (音楽研究科音楽芸術専攻)

私がフェリス女学院大学を受験した時、正直に言えば、将来についてはほとんど何も考えていませんでした。ただ音楽を幅広く、楽しく学べればそれでいい。そのくらいの気持ちで大学生活を思い描いていました。「将来何がしたいのか」「どんな人になりたいのか」といったことを深く考えることもなく、何となく進学を決めたのを覚えています。しかし、その考えは入学式の日に大きく変わりました。祝賀演奏で聴いたパイプオルガンの音色に、圧倒されたのです。空間全体を包み込むような響き、身体の奥まで届く低音に、「こんな音楽があるのか」「パイプオルガンを弾いてみたい」と、強く心を奪われました。その時の感動は、今でもはっきりと覚えています。

大学1年生の前期には、早速パイプオルガンの授業を履修しました。オルガンに触れるたびに、その魅力に惹かれていきました。一方で、大学生活は順調なことばかりではありませんでした。1年生の後期には体調を崩して自主休学をし、3年生、4年生の頃にはコロナの影響で、思うようにオルガンを弾けない時期が続きました。練習したくてもできない、前に進みたくても進めない。そんなもどかしさを何度も味わいました。大学卒業後は、当時設けられていたディプロマコースという、演奏に専念できるコースへ進むことを選びました。その1年間の中で「オルガンを学びたい」という思いは、さらに強くなっていきました。そして、大学院に進学したいと考えるようになりました。

特別に裕福な家庭ではなかったため、親を何度も説得し、大学院への進学を認めてもらいました。その条件の一つが、教職を取得することでした。学部時代に一度教職を諦めていた私は、「教職を取るには3年かかる」と言われましたが、学費のことを考え、「2年で単位を取りきろう」と決意しました。その結果、大学院生活は想像以上に忙しいものとなりました。学部1年生と同じペースで授業を履修する中で、再び体調を崩してしまい、2年での修了は叶いませんでした。「もっと上手く調整できたのではないか」「もっと演奏活動ができたのではないか」と後悔する気持ちがないと言えば嘘になります。

けれど、それ以上に今、心にあるのは感謝の気持ちです。何も言わずに学費を払い続けてくれた両親、どんな時も突き放さず、親身になって指導してくださった先生方、他愛もない話をして笑いあった友人たち、そして、ともに学び、練習に打ち込んだオルガンチームの皆さん。多くの人に支えられて、今日の私があります。何もなかった私に居場所を作ってくれて、本当にありがとうございました。

最後に、後輩の皆さんに伝えたいことがあります。人生の中では、やりたいことができなったり、体調を崩してしまったり、思うようにいかないことがたくさんあります。けれど、たとえ遠回りをしたとしても、その時間の中でしか学べないことがあります。何が正しいのか、何が間違っているのかは、誰にも分かりません。だからこそ、どうか健康を大切に、今置かれている場所で、何事も楽しんでほしいと思います。フェリス女学院大学で過ごした8年間は、決して無駄ではありませんでした。この場所で出会ったすべての人と、すべての経験に、心から感謝しています。

「自分を赦すために」 1月19日 チャペルサービス

U・Y (文学部コミュニケーション学科4年)

「隣人を自分のように愛する」ということについて、考えたことはありますか。

私は、周りの人に「もっと自分を大切に」とか「どうしてそんなに生き急ぐの」と、言われたことがあります。周りの事を考えすぎることが、自分を犠牲にすることが、多々あったからでしょう。私はこれを、「愛」だと思っていました。「善いこと」だとも思っていました。しかし、どうでしょうか。物事は円滑に進むかもしれませんが、それは本当に「愛」と言えるのでしょうか。「愛」のひとつにかわりないかもしれませんが、私は友人に「優しすぎて怖い」、「偽善者」、と言われました。

そこで、なぜ私が、「自己犠牲の精神」として生きているか、という根本を考えるようになりました。その中で、「自己嫌悪」「自己否定」が課題であると、気がつきました。自分が嫌いだから、自分に自信が持てず、その人に合わせて、自分をつくり、それを無意識に行っていること。私は所詮、仮面をかぶり、役を演じているということ。

しかし、そうだとすると、私はそういう生き方しかしてこなかったの、ほかの生き方を知りませんでした。この生き方を否定されては、「私」はどう生きればいいのか、と苦しみました。

そのひとつの答えに出会ったのが、神父様にはじめて懺悔をした時でした。

私は神父様に問いました。

「隣人愛は、「自分を愛するように」と言われていますが、私は自分自身が嫌いです。それでは隣人愛とはいえないと思います。どうすれば良いのでしょうか。」

その問いに、神父様は一言、「私もです」と笑ってくださいました。

この言葉を聞いて、このまま生きていいんだ、と思いました。

生きることに、許可など必要ありませんが、自分の生き方を受け入れてくださっている言葉、そして敬愛する神父様も「同じ」であるという言葉が、私にとって、最高のお恵みでした。

この日から、特に主イエス・キリストとの対話の時間をよく取るようになった気がします。

そうすることで、弱い自分を受け入れ、そんな自分をも愛してくださる主がそばにいてくださると、感じられるからです。

愛とは、「赦し」です。

人は皆、違う価値観、性格、そして言葉を持っています。これらの違いを受け入れ、「赦す」こと。そこに愛があると思います。おそらく、皆様のそばには、あなたの弱さや醜さをも全て、受け入れてくださる方が、きっといらっしゃる。そしてあなた自身も、そのように想う方が。

私にとって、そのひとりが、主イエス・キリストであった、ということでした。

フェリス女学院大学に入学し、そこからこんにちに至るまで、わたしは多くの人に出会い、多くの人に支えられ、多くの人に愛され、多くのことを経験してまいりました。

また、自分の課題、罪と向き合い、自分の信仰を疑い、対話をする時間を過ごすことができました。このお恵みと、ここまで私を支えてくださった、家族、教職員の皆様、友人、そして関わってくださった全ての方々へ、この場を借りて感謝を申し上げます。皆様と出会えたことが、なによりの賜物です。これからは皆様の生活が、光にてらされ、より豊かな時間を過ごすことができますように。

皆様が、赦しあえるような方と出会い、愛に溢れた日々を過ごせますように。

歩む道が暗くとも、その光と愛によって、道が灯され、導かれますように。

いつも平和が皆様とともにありますように。

どうか、神の御加護があらんことを。

フェリス女学院大学山手キャンパス礼拝の歴史

フェリス女学院大学の礼拝は、1965年（昭和40年）、大学開設と同時に始まりました。

パイオルガンの設置（1982年）

1982年（昭和57年）6月8日、念願のパイオルガン（辻オルガン）が設置されました。当時礼拝の場所として用いられていた山手旧3号館343教室にて、奉献礼拝と披露演奏会が執り行われました。このオルガンは、辻宏氏の手作りによるものです。現在は、緑園キャンパス5号館練習室に設置されています。

山手旧3号館礼拝堂の完成（1989年）

1989年（平成元年）には、山手旧3号館院長室、学長室、応接室、秘書室、講師室の壁を取り払うとともに、カナダからインテリアの材料を輸入するなど、礼拝堂にふさわしい内装設計が施され、山手旧3号館礼拝堂が完成しました。

フェリスホールでの音楽礼拝の開始（1989年）

同年、音楽学部発足と同時にフェリスホールが新設され、パイオルガン（石井記念オルガン）が奉献されました。これ以降、週5日行われていた山手礼拝のうち1日を音楽礼拝の形式で、フェリスホールで行うようになりました。

礼拝奉仕は、オルガン教員を中心に、声楽やバイオリン等の教員、学院長、学生、副手、中高教職員、大学教職員など、多くの人々によって担われました。また、外部からお招きした先生にご奉仕いただいた記録も残されています。

「音楽と言葉による賛美」への発展（2000年ごろ）

2000年（平成12年）ごろからは、フェリスホールでの音楽礼拝にも必ず説教者が立てられるようになり、「音楽と言葉による賛美」として礼拝が捧げられるようになりました。礼拝説教は、学長や大学宗主任（大学チャプレン）だけでなく、学内の多くの教職員による奉仕で成り立っていました。また、近隣の教会の牧師を招いての礼拝も行われていました。

緑園キャンパスでの礼拝開始

山手キャンパスでは、1965年の大学開設以来、欠かさず礼拝が守られてきました。また、1988年に緑園キャンパスが開設されてからは、山手キャンパスと緑園キャンパスの両方で、礼拝が捧げられるようになりました。

山手旧3号館礼拝堂からフェリスホールへ（2001-2002年）

2001年（平成13年）1月22日をもって山手旧3号館礼拝堂での礼拝は終了しました。2002年度（平成14年度）からは、山手キャンパスでは、フェリスホールでの水曜礼拝「音楽と言葉による賛美」のみが行われるようになりました。

山手木曜礼拝の開始（2004年）

2004年（平成16年）からは、「山手木曜礼拝」として毎週木曜日にフェリスホールでの礼拝が守られるようになりました。山手キャンパスでは、新型コロナウイルス感染症の時期を除き、2023年度（令和5年度）までこの形式を基本とした礼拝が続きました。

山手木曜礼拝の縮小と今後の展望（2026年以降）

2024年度（令和6年度）頃から、クリスチャンの教職員数の減少により、従来の「山手木曜礼拝」の運営体制の維持が難しくなり、2025年度（令和7年度）後期から「山手木曜礼拝」の縮小が決定しました。同年のグローバル教養学部の新設に伴い、音楽学部は募集停止になり、「山手木曜礼拝」は、2025年度末をもって休止となります。しかし、今後、音楽をもって奉仕したいと望む多くの学生とともに礼拝をおさげできる機会が、何らかのかたちで与えられることを祈る次第です。（M・H）

参考資料：山手週報、待望54号



山手木曜礼拝～音楽そのものの演奏によって賛美と祈りをささげる～

宇内 千晴（本学非常勤講師）

振り返ってみますと、フェリス女学院大学に携わるようになった1993年より今日に至るまで、私のフェリスでの生活はいつも山手礼拝と共にあったように思います。山手旧3号館の礼拝堂における礼拝もフェリスホールでの礼拝も、私はいつも後方の席に座っておりましたが、前方には長年にわたり、歴代の理事長、学院長、学長のお姿がありました。一非常勤教員からすると雲の上のように思われる方々、重責を担う方々が、それぞれひとりのキリスト者として神様の御前に頭を垂れておられる後ろ姿から、私は無言のうちに多くのことを学ばせていただいたように思います。そしてそのような方々が、気さくに声をかけてくださったことも今では懐かしい思い出となっております。

1989年には、フェリスホールにテラー&ブーディー社製作による18世紀ドイツ・バロック様式のオルガンが設置され、しばらくして週1回そこで音楽礼拝が行われるようになりました。当時オルガン科の教授であられた林佑子先生による手書きのメモには、次のように記されています。私の記憶に間違えがなければ、これは教授会に提出された資料ではないかと思われます。

「音楽礼拝について」

大学の礼拝として、宗教委員会主催により、文学部3号館礼拝堂で月曜より金曜まで毎日礼拝が行われています。その内の一日、火曜日を音楽礼拝として、音楽学部フェリスホールにて毎週12時30分から12時50分までの20分間行います。

礼拝のオルガン奏者は講師陣の林（佑子）、三浦（はつみ）、宇内（千晴）、海野（葉子）、副手の浅井（寛子）諸姉（*1）ですが、近い将来この音楽礼拝に学生も参加させたいと考えています。（ ）内は執筆者による補足（*1）宮本とも子名誉教授（当時非常勤講師）は、すでに奏楽をなさっていた。

形式 宗教音楽の演奏 讃美歌一曲斉唱（講和、祈り、聖書朗読無し）

即ち、音楽そのものの演奏によって、さんびと祈りを捧げる

曲目 奉仕者は、その日のオルガン奏者である講師

例：20分のオルガンプログラムの中に学生によるカンタータ、オラトリオ、其他からの独唱、二重唱、小合唱曲を一曲（又は数曲）入れる

演奏者 担当の先生のすいせん（ママ）又はオルガン講師の選択による

林先生は、音楽礼拝の目的を「神様からの賜物である音楽そのものの演奏によって、さんびと祈りを捧げる」とされました。同時に教育者として、先生ご自身が奏楽をなさることで模範を示し、若手講師には研鑽を積む機会を与え、学生には講師演奏を通して刺激を与えておられたように思います。やがて林先生の願いどおり、学生たちも奏楽者として奉仕に加わるようになりました。

山手音楽礼拝は、その後大学の変遷と共に様々な変化を遂げましたが、現在もおクリスチャンの教職員と共に有志の学生たちが礼拝奉仕に携わっています。学生たちからは、「礼拝奏楽は緊張するが、とても良い経験である」「また奉仕したい」との声が寄せられています。私も一教員として、将来彼たちが各地にある教会で奏楽を担う際の一助となることを願いつつ、奏楽の準備を手伝っております。

今後も『フィリピの信徒への手紙』2章6節以下にあるキリスト賛歌を背景とする“For others”の精神の土台としての礼拝が大切にされ、本学から、引き続き音楽の分野においても主の働きを担う人たちが輩出され続けることを願って止みません。Soli Deo Gloria（ただ神にのみ栄光あれ）

戦後80年 平和について考える

相澤 一（本学宗教主事・心理コミュニケーション学科教授）



今年（2025年）は「戦後80年」ということで、多くの特番がテレビで放送されたり、行事やイベントが行われたりしました。フェリス女学院大学のキリスト教センターも、「平和を祈るチャリティーコンサート」を、8月6日に行いましたが、プログラムの中で、学生によって、讃美歌21 444番「気づかせてください」の讃美が行われました。

気づかせてください、知らずに犯したつみを。
与えてください、罪を見つめる力を
立たせてください、あの隣り人の前に。
そして立つてください、主よ、わたしたちの間に。

今年の平和祈念式典で、天皇陛下は追悼のお言葉を述べられました。また、高市総理は、マレーシアを訪問した際、クアラルンプール日本人墓地とマレーシア国家記念碑を慰霊に訪れました。どちらも、日本人犠牲者を追悼・慰霊する式典でした。太平洋戦争では、日本人の兵士230万人、民間人80万人が亡くなりました。しかし、日本による外国人の民間人の犠牲者の数は、一千万人以上と推定されています。彼らは追悼も慰霊もされず、忘れられたままなのではないでしょうか？

アメリカのスミソニアン航空宇宙博物館には、広島に原爆を投下したアメリカ軍の爆撃機、B29「エノラ・ゲイ」号の実物が、保存展示されています。講演者が訪れた時、たくさんのアメリカ人たちが、順番待ちの行列を作って、エノラ・ゲイをバックに、ピースサインをしながら自撮りをしているのを目にしました。その行為に抵抗を感じる日本人は少なくないでしょう。しかし、私たち日本人も、実は彼らと同じことをしてはいないのでしょうか？

今年（2025年）、異文化コミュニケーションゼミでは、タイでゼミ合宿を行い、カンチャナブリで泰緬鉄道に乗りました。泰緬鉄道とは、太平洋戦争中に日本によって敷設された、タイとミャンマーを結ぶ鉄道です。建設工事には、連合軍軍捕虜6万5千人、現地徴用の労務者40万以上が動員されましたが、事故や病気や栄養失調などで捕虜1万5千人、現地徴用の労務者10万人以上が亡くなりました。あまりにも多数の死者が出たため、「枕木一本につき死者一人」と言われ、泰緬鉄道は別名「死の鉄道」とも呼ばれます。

近年、泰緬鉄道の世界遺産登録に向けた動きがあるそうです。しかし、ほとんどの日本人は、泰緬鉄道という名前すら聞いたことがないのではないのでしょうか？

現地ガイドの方は、「泰緬鉄道に日本人が訪れることは滅多にない。若い日本人を案内したのは初めてだ」と何度も言っていました。讃美歌21 444番の歌詞に「与えてください、罪を見つめる力を」とあります。日本人は、自分の罪を見つめる力がなくて、気づかないふり・知らんぷりをしているのでしょうか？ それでは、B29をバックに自撮りするアメリカ人の若者を非難する資格はないのではないのでしょうか？

シンガポール初代首相、故リー・クワンユーは、戦時中の日本の残虐項について、「Forgive, but never forget」（ゆるす、しかし決して忘れない）と語りました。現在、日本は、戦時中に残虐行為を行ったアジアの国々と、友好関係を持っています。それは、アジアの国の人たちが、日本をforgiveしてくれているからです。しかし彼らのforgiveに対して、日本は戦後80年間、forgetして過ごしてきました。しかし、forgetすることは、forgiveに対する誠実な応答でしょうか？ 自身の戦争加害を忘れて、なかったことにし続けるなら、日本は、アジアの国々と今後も友好関係を保ち続けていけるのでしょうか？

森有正は、「人間と人間を結ぶ絆——わだつみのこえに答える」という文章を、「きけわだつみのこえ」に寄せて寄稿しました。その中で森は一つの未来のビジョンを示して見せます、

私どもが『きけわだつみのこえ』を前にして、あの人々の死を犬死たらしめてはいけないと思ったり言ったりすることは、私ども自身まだ十分に発見していない、全人類を結びつけるなにかある偉大な紐帯を象徴しているのではないのでしょうか。

ここで森先生がおっしゃっている「全人類を結びつける絆」について、エフェソの信徒への手紙1・8～10にはこのように書かれています、

神は、この恵みを私たちに溢れさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、御心の秘義を私たちに知らせてくださいました。これは、前もってご自身でお決めになっていた御心によるものであって、時が満ちるといふご計画のためです。それは、天にあるものも地にあるものも、あらゆるものが、キリストのもとに一つにまとめられることです。

キリスト教には、アナケファライオーシス（万物の再統合）という思想があります。それは、全人類を結びつける絆は、神がご計画されていることであり、神が定めた時が来ると、「あらゆるものが、キリストのもとに一つにまとめられる」という信仰です。

担当者がお世話になった牧師先生は、「放蕩息子のたとえ」（ルカによる福音書15・11～32）について、2つのことをお話しくださしました。

第一に、悔い改めは、一度悔い改めたらそれで終わりではなく、「関係回復の中で絶えずなされる。回復された関係の維持の中で、悔い改めが、通奏低音のように鳴り響く。」

第二に、「悔い改めは、帰って来た放蕩息子を抱きしめる父親の腕の中で行われる。」悔い改めは、父のゆるしを引き出す手段ではありません。父に与えられたゆるしに応答するという思いが、通奏低音の如く響く、ゆるされたことへの感謝を伴う悔い改めの生へと息子を促します。それが、ゆるされた者にふさわしいあり方であり、生き方です。

戦後80年間、日本が歩んできた道は、アジアの国々に対してしたことをforgetして済ませてきた道でした。しかし私たちは、自分の罪を見つめ、その罪をforgiveしてくれたことに対する悔い改めと感謝を抱くことなしには、本当にアジアの、そして世界の隣人の前に立つことはできないのではないのでしょうか？

かつて日本が経済大国だったころ、日本はアジアの国々を、「貧しい遅れた国」と見下していました。しかし現在、もはや日本は経済大国ではなくなりました。その姿は、まるで一文無しになった放蕩息子のようです。今こそ日本は、悔い改めて、真摯にアジアの人々に向き合わねばならない時が来ています。しかし、無宗教の国といわれる日本が、自力で、神の力なしで、それができるのでしょうか？

残念ながら、戦後80年間の日本の歩みは、それができないことを証明する歩みでもありました。戦後80年という節目の年である今こそ、罪と向き合う力を与えてくださるよう神に祈り求める時ではないのでしょうか？ その力なしに、戦後90年、100年、110年……は、決して「真の平和の道」とはならないでしょう。日本がこれから歩む道が「不正と悪の世界に」勝つ歩みとなることを心より願ひ、これから日本の歴史を担っていくみなさんに、この講演が少しでもみなさんの助けになればと願います。